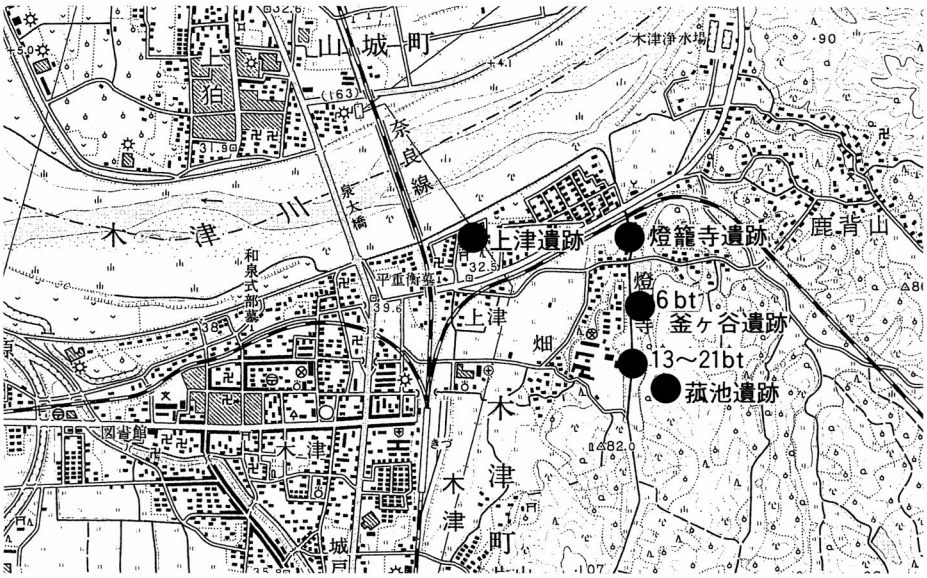
木津町釜ヶ谷遺跡出土祭祀関連遺物について

有井広幸

1．はじめに

平城宮跡から数km北にある、木津川の支流が開いた釜ヶ谷は、京都府木津町の東側に位置する丘陵地の西端を南北約2km、最大幅約100mの規模で続く細長い谷をいう。釜ヶ谷遺跡はこの谷の下流側・北半部に位置し、付近の遺跡を含めて木津町南東部及び東部は近年の関西文化学術研究都市開発に関連して調査が行われ(注1)、現在も東部を主として調査は継続中である(第1図)。釜ヶ谷遺跡の調査では奈良時代の流路内から墨書人面土器、人形、斎串、土馬などの祭祀遺物がまとまって出土(注2)しており、同様の遺物がこの谷の下流の燈籠寺遺跡でも出土している(注3)。今回この二つの遺跡と、両遺跡の西方数百mの木津川南岸に位置し、奈良時代を中心とする上津遺跡の出土例をまじえて、自分なりにこの付近の奈良時代の祭祀のあり方、特に墨書人面土器を中心とした祭祀の状況についてまとめておきたいと思う(注4)。



第1図　釜ヶ谷遺跡周辺図

２．釜ヶ谷遺跡と周辺遺跡の状況

釜ヶ谷遺跡は３次にわたって調査され、縄文時代から近世の遺物が出土することで知られるが、いずれも自然流路内や水田跡からの出土である。今回注目する奈良時代の祭祀関連遺物は、いずれも釜ヶ谷川の旧流路内から出土したものである。遺物の出土地域は調査成果から第１図の６bt地点及び13～21bt地点の大きく２か所に分けられる。６bt地点ではミニチュア土器・韓竈、墨書人面土器に加え人形、斎串など木製品が多く出土した。13～21bt地点では緑釉小壺(第３図20)、瓦、土馬(第３図23)とミニチュア土器・韓竈、墨書人面土器が出土している。土師器類は墨書人面の有る無しに係らず、完形やそれに近い形で出土する例が多かった。また、壺Ｂの一部には内面全体に漆の付着するもの(第３図21)がある。時期は土馬の特徴などから奈良時代前半期を考えている。

釜ヶ谷の周辺では、奈良時代の祭祀遺物が数か所で確認されている。

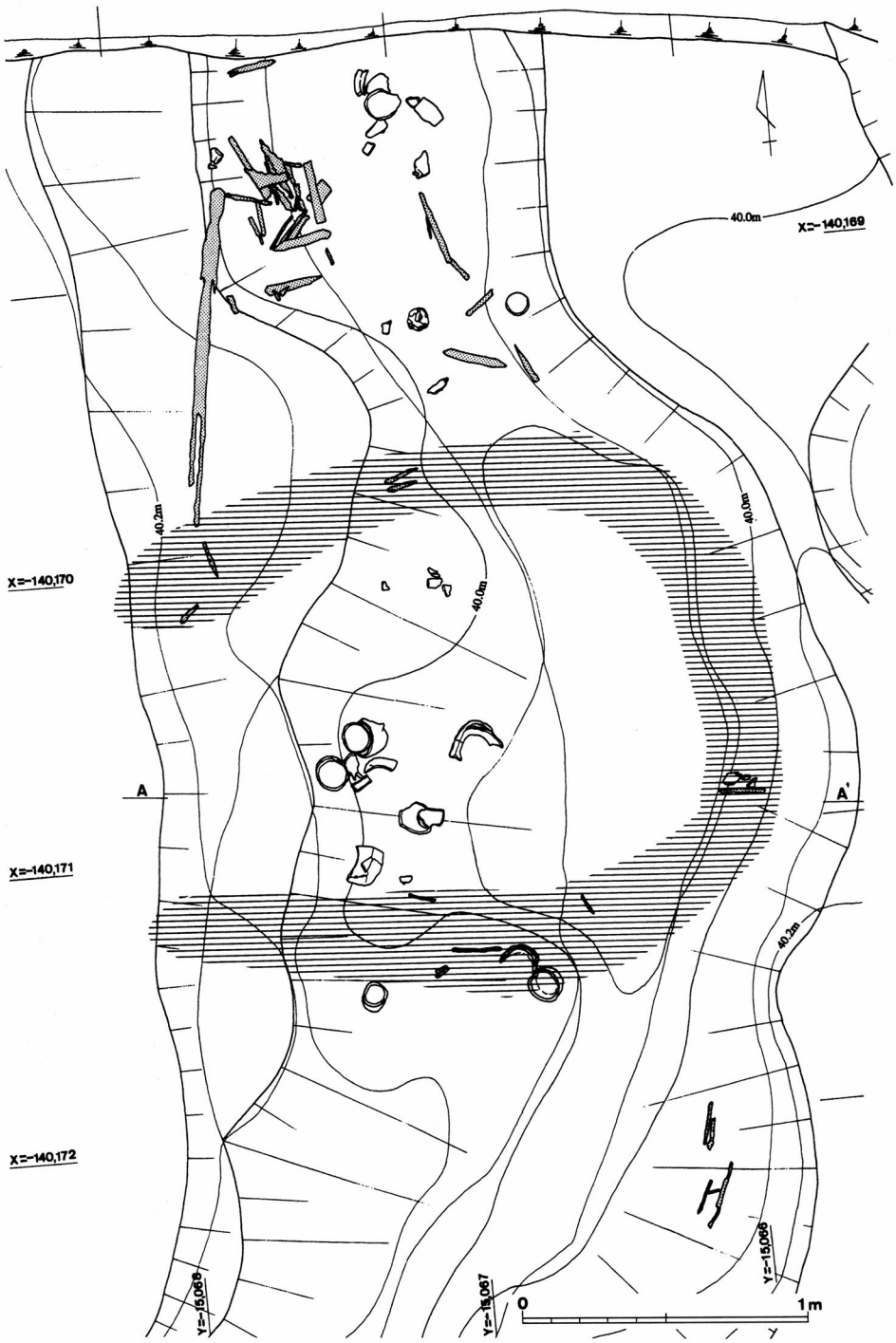
前述の燈籠寺遺跡の調査地は、燈籠寺廃寺の東側に位置し、釜ヶ谷川の旧流路と考えられる河川堆積内から縄文時代後期の土器や弥生土器のほか、７～８世紀の瓦類・須恵器・土師器が多く出土し、墨書土器の例も多い。そのなかに混じって墨書人面土器も出土しているが、人面の表情が分かる例はほとんどない。また、釜ヶ谷遺跡13～21btで出土したのと同様に、壺Ｂの一部には墨書の無い例や、内面に漆の付着するものがある。

上津遺跡は釜ヶ谷遺跡の北西方向、木津川の南岸に位置し、多数の掘立柱建物・土坑・溝などが土器・瓦など大量の遺物とともに見つかり、奈良時代の「泉木津」推定地とされた。(注5) 遺跡は奈良時代を通じて存続したようであるが、中心時期は奈良時代前半期に求められるようである。祭祀関連遺物は調査地各所より破損した土馬が確認され、東西方向の大規模な溝(検出長約180ｍ・幅1.2～2.6ｍ)ＳＤ01から墨書人面土器、ミニチュア韓竈のセットが出土している。時期は奈良時代前半期のものという。墨書人面土器は具象的に人面を描いたものはなく、人面を抽象化した省略形ともみられるとした縦方向の直線文・波状文・列点文が描かれている(第４図１・２)。こうした例は、先述した釜ヶ谷遺跡13～21bt出土の例に類似する点と言えよう。

このほか、釜ヶ谷の東西両側の丘陵上でも祭祀関連遺物が出土している。西側の木津高校内の燈籠寺遺跡では土坑内から土馬が出土している。(注6) 東側の菰池遺跡では包含層から土馬片他が出土するなど、(注7) 丘陵各所で祭祀行為が行われていたようである。

３．６btの祭祀関連遺物の出土状況について

釜ヶ谷遺跡で行われていた祭祀の様子を想定するために、６btでの検出状況の概略を述べておきたい。この部分では、北流する流路ＮＲ01(幅約2.1ｍ・深さ約0.4ｍ)の西岸か



第２図　釜ヶ谷遺跡６bt地点遺物出土状況(注２文献より転載)

ら中央にかけて人形、斎串他の木製品、硯に使われた須恵器杯蓋、墨書人面土器などが出土するとともに、甑・カマコ・竈３点のミニチュア韓竈の２セットが重なって、あるいはまとまって川の西肩付近で見つかった。遺物の出土範囲は、上流側には祭祀関連遺物出土の空白域があり、ここから第２次調査で墨書人面土器等が見つかった下流域にかけての出土品が、一括のものと考えられる。

第２図で示した平行線部はミニチュア韓竈のセットが見つかった付近を中心に、斎串が出土した部分を大まかに結んだものである。斎串の多くは人形付近から落ち葉などに混じって、ほぼ水平に折り重なって出土したが、何点かは上流側の両岸で見つかっている。人形付近で出土した斎串は比較的薄く、先端部の両側に切り込みを施したものである。上流側で出土した斎串は断面方形の幅の無いものが目立ち、斜めに刺さった状況で出土した。斎串のタイプの違いと斜めに刺さった状況からすると、一部の斎串は祭祀を行う場の結界としての用途を想定できそうである。そして、結界内の川の西岸側で東向き(?)に竈を据え、神を招き祈り、墨を摺って土器や人形に人面を描き、付近から下流に向け墨書人面土器を流した様子を想像している。墨書人面を描かれた土器の多くが完形で出土することからこの類推は可能であろう。祭祀が終わった後、使った道具類は持ち返らないことになっていたためか、転用硯の須恵器杯蓋は割れた複数の破片が出土している。竈の類は岸から転がし落され、人形と斎串の類は、祭祀の後まとめて傍らの川のなかへ廃棄されたのであろう。ただし、13～21bt 地点で斎串は見つかっていないので、こうした利用を含め斎串の使用が常であったかどうかは不明と言わざるを得ない。

４．墨書人面を描く意味について

次に墨書人面の描かれ方に注目してみると、13～21bt の出土例ではバラエティが豊富な点が目立つ。墨書人面土器として使用されている土師器類のうち13～21bt で出土する壺Ｂは小型品が多く、他の器種を含めても墨書の無い例（Ａタイプ）、人面を描かずに直線文などの表現をもつ例（Ｂタイプ）があり、人面の表現でも素朴で稚拙な描き方（Ｃ１タイプ）である。以下、第３図では、Ｂタイプとして３～６があり、頸部と胴部下半に水平線を入れ、さらに口縁から胴部にかけて十文字に直交する線を入れて、全体を墨線で包むような表現になる。また、２では小さな顔にクラゲの様な手足が描かれたり、１ではカマボコ状の土師器を２個体口縁で接合し、俵形に整形した特殊な土器に素朴な顔を両側面に各々描き、Ｃ１タイプの例といえよう。一方、６bt 出土例には線表現の例はなく、７・８のようにやや稚拙ながらも明確に顔を描いたり、９・18のようにつり上がった眉、大きな口に髭といった、いわゆる墨書人面土器の例に近いもの（Ｃ２タイプ）が出土している。

第３図　釜ヶ谷遺跡出土遺物（注２文献より転載）

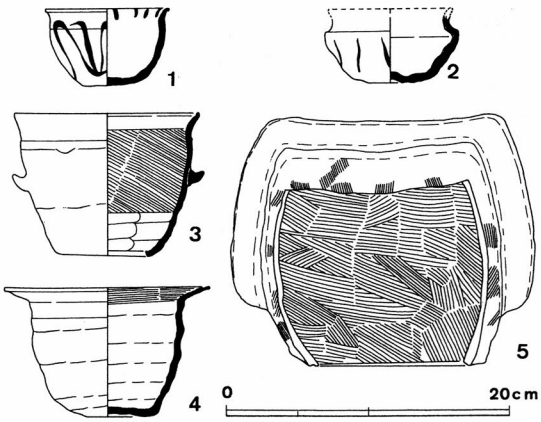
いわゆる墨書人面土器の墨書表現は、その名前のとおり人面表現が描かれることが、奈良時代から平安時代にかけて一般的である。一方で今回示した墨書表現Ａ～Ｃ２タイプが、一連として出土する状況についてどう考えるべきであろうか。人面を描かないＡ・Ｂタイプのものも Ｃタイプのものと同様の祭祀に用いられていたと考えられることは、出土状況からいえる。また、使われている土器、主に土師器壺Ｂについての形態から、Ａ・Ｂタイプのものは、Ｃタイプのものに比べ、小ぶりのものが用いられており、時期がやや古くなると考えている。以上のことから、こうしたＡ・Ｂ・Ｃタイプの出土状況は墨書人面土器を用いる祭祀の初期形態の変化を示していると考える。つまり、墨書人面土器を用いる祭祀の初期は墨書を行わずそのまま土器（Ａタイプ）を流していた。次に人面を描かず墨書（線）を巡らすようになり（Ｂタイプ）、さらに墨書人面を描くようになっていったのではないだろうか。

では、なぜ墨書の内容がこのように変わったのだろうか。墨書人面土器の多くは出土状況から完形で流されたと考えられるが、このことは土器の容器として、つまり何かを入れて流し去ることの意味があったと考えられる。この時、中のもの（実態はなかった？）が出ないように蓋（木の葉他？）をしたのかもしれない。この蓋と土器口縁部とを密着、封をするのに接着剤用に漆を使うために持ち込んだのでないだろうか。先に釜ヶ谷遺跡、燈籠寺遺跡の調査で完形で出土した土器内に漆が付着した例を上げたが、ほとんど祭祀関連遺物しか出土しない河川内から、こうしたものが供伴する意味がここにあると考える。ついで封じ込めの意味を強くするため、紐掛けする様に口縁から胴部にかけて十文字に直交する線の表現や、口縁部を縫い取りするような波状文・列点文の表現をするようになり、封印性を高めた。さらには封じ込めたものの姿（人の姿をした神、霊？）を土器に描くことにより、封じ込められた霊や神をより視覚的に、確実に流し去る形態として定型化することになったのではないだろうか。こうした墨書人面を描くまでの変化の過程を窺える可能性のある事例、特に墨書きの線表現は、平城京東堀川出土の例[注8]をあげておきたい。

５．祭祀の実行者について

こうした祭祀を行っていたのはどのような人々だったのだろうか。構成する道具類に注目すると、まず墨や筆を使うことに慣れており、文字資料は少ないが識字層であることは想定できる。さらに、人面表現の筆致はかなり整ったものもあり、表情のつくり方にも描き方にも習熟した雰囲気がある。緑釉小壺やミニチュア土器、土馬など特殊品を使っての祭祀を行っていることから、かなりの経済力も持っていたはずである。同様の祭祀例は平城京内やその周辺での確認が多いが、平城京に住んでいた人達がこの谷まで来て一連の祭

祀を行ったと考えるよりも、地理的な面からも上津遺跡との関係を重視するべきであろう。先述したように上津遺跡とは墨書人面土器他の祭祀遺物では共通点も多く、鉛釉陶器小壺も出土しているほか、遺跡の最盛期の時期が奈良時代前半という点でも重なる。上津遺跡の溝での祭祀は、調査地内では遺物の出土量からすると継続的に行われておらず、溝からは人面の描かれた土器なども出土していない。この点は、逆に上津遺跡で生活していた人々に、釜ヶ谷が祭祀を行う場所と認識され、継続的に行われていた祭祀が上津遺跡の衰退時期に行われなくなることと連関するとも考えられよう。



第4図　上津遺跡ＳＤ01出土遺物(注５ｂ文献より転載)

以上の条件からすると、当時平城京を支えていた「泉木津」の役人などが、こうした祭祀を行っていた可能性が高いと言えよう。

6．まとめにかえて

釜ヶ谷遺跡の調査担当者として、自分の思い込みのままに話を進めてきたが、一応述べてきたことを整理しておきたい。

釜ヶ谷遺跡における奈良時代の祭祀は、小河川の岸辺と流れを舞台に奈良時代の前半頃に継続して行われていた。祭祀に使用されていたのはミニチュア土器・韓竈、墨書人面土器、土馬に加え人形、斎串など木製品、緑釉小壺などが挙げられる。祭祀形態で特に注目したのは、墨書人面土器の変遷過程についてである。墨書人面土器を用いる祭祀の初期は、墨書せずそのまま土器を流していた。やがて、人面を描く前段階として墨書(線)を巡らすようになり、更に墨書人面を描くようになっていった。このように変遷する意味については、土器の中に霊魂や神を封じ込め、より視覚的に、確実に流し去る形態として定型化することになったと考えた。封じ込め用の蓋の接着剤に漆を使用した可能性も指摘した。

ただし、墨書人面土器の祭祀形態がこの場所で定まったとは、平城京関係の例もあり、言いきれるものでもない。奈良時代から平安時代にかけて盛んに行われた、土器に人面を描くという祭祀形態の変化・定着していった過程の一想定にはならないだろうか。

さて、釜ヶ谷遺跡で祭祀をしていたのは、地理的な近さや祭祀の使用品、墨書による表現などから、当時平城京を支えていた「泉木津」関係の役人などを考える。

最後に、祭祀と言いながら、当時の人が具体的に何を願っていたのか結論を見い出せない自分を反省しつつ、終わりとしたい。

（ありい・ひろゆき＝京都府教育庁指導部文化財保護課技師）

注1　関西文化学術研究都市の木津地区は、都市基盤整備公団（前住宅・都市整備公団）により順次開発が進められ、中央地区に含まれる釜ヶ谷遺跡は昭和59年、平成6・7年の計3次にわたって調査された。

注2　a．松井忠春他「木津地区所在遺跡昭和59年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第17冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1985（第1次調査）

b．石井清司「木津地区所在遺跡平成6年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第68冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1996（第2次調査）

c．有井広幸「木津地区所在遺跡平成7年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第73冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1996（第3次調査）

注3　伊賀高弘「燈籠寺遺跡・燈籠寺廃寺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第64冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1995

注4　全体を通じて、文化庁・東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館監修『日本の美術第361号　まじないの世界Ⅱ（歴史時代）』（至文堂1996）を参考にした。

注5　a．平良泰久「考古編」『木津町史・史料編』　1984

b．平良泰久・奥村清一郎他「木津遺跡第二次発掘調査概報」（『木津町埋蔵文化財調査報告書』第3集　木津町教育委員会）　1980

注6　大槻真純「内田山古墳群発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第4冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1982

注7　伊賀高弘「菰池遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第90冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1999

注8　中井　公「平城京東堀川」（『日本考古学協会1996年度三重大会シンポジウム1水辺の祭祀』日本考古学協会1996年度三重大会三重県実行委員会）　1996